

## 要旨

### 三島文学における男性の世界と女性 —『禁色』論—

李 佳炫

本論文は、『禁色』を男性主人公である俊輔および悠一と関わる女性たちの支配的な性質に着目して分析し、男性世界がいかに女性の影響下にあるのかについての検討をおこなう。三島は現実においては様々な形で女性への蔑視と嫌悪を表したが、作品の中では自分の女性観とは矛盾する女性像を描いており、三島文学において女性像は重要な鍵となっている。特に、存在感の薄い男性人物と主体性をもつ女性人物の相異が顕著に描かれている。むしろ男性は自ら進んで女性による支配の下に入って行くように見える。この観点から分析をおこなうことで、俊輔と悠一が康子、鎗木夫人、そして恭子という女性の影響下に自発的に自らを置く過程を明らかにする。女性を男性の従属者とみなす作家三島の女性観とは逆に、その男性を支配する女性像について検討するのがこの論文の目的である。

## Abstract

### Women in a Man's World: An analysis of Mishima Yukio's *Kinjiki*

Kahyun LEE

This paper investigates Mishima Yukio's novel *Kinjiki* (*Forbidden Colors*, 1951) focusing on the dominant nature of the women involved with the male protagonists Shunsuke and Yūichi. Despite his notorious misogyny, Mishima regularly depicted women that sharply contradict his own sexist view of women, making them a hitherto largely unexplored but essential part of his work. In fact, the prevalent contrast we can observe between the rather weak, forgettable men and the strong, independent women indicates that men themselves seem to willingly submit to women in his novels. As a case in point, we find that *Kinjiki* clearly depicts how the men Shunsuke and Yūichi place themselves under the control of the women Yasuko, Mrs. Kaburagi, and Kyōko. Contrary to Mishima regarding women as subordinate to men, this paper emphasizes the presence of dominant female fictional characters in his work and examines their meaning.

# 三島文学における男性の世界と女性

## — 『禁色』 論 —

李 佳 吟

### 1. はじめに

三島は、1951年に『禁色』<sup>1</sup>を『群像』で連載し始める。『禁色』は、「廿代の総決算」<sup>2</sup>だという三島自身の意気込みどおり、精神と肉体の対立、同性愛、芸術論など関わる観念的な内容が掘り下げられた複雑な様相を呈した作品である。特に、男性の精神性が強調されており、それに沿った研究が数多くある<sup>3</sup>。たしかに『禁色』は、男色を中心テーマに捉え、俊輔と悠一という二人の主人公を軸に物語が展開している。女性に対する俊輔の復讐がこの物語の枠組みとして設定されているが、それは俊輔が女性の愛を渴望してきたことに起因しており、男性たち自らが女性の影響下で生きることを選択しているのだと捉えることもできる。そしてこうした男性たちと対比的に、男性世界を操る女性人物が浮かび上がるのである<sup>4</sup>。

作家三島に対しては男流文学や女性蔑視といった評言がよく付されるにもかかわらず、三島は様々な女性像を描いており、三島文学において力強い女性像は重要な鍵となっている。決断力と行動力が不足した優柔不断で存在感の薄い男性主人公との対比によって強調される主導的な女性像が特徴的である。

まさに上記の特徴を鮮明に表す作品が『禁色』である。まず、男性人物にのしかかる女性人物一般の大きな力を確認しておきたい。

この男ばかりの世界には、しかし或る巨大な女の影が投影してみた。悉くがこの見えない女の影におびえ、あるものはこの影に挑戦し、あるものは諦観し、あるものは抵抗のあげくに敗北し、あるものははじめから阿つた。悠一は自分がその例外者であることを信じた。次には例外者であることを祈つた。次には例外者であらうとこれ努めた。せめて奇怪な影の影響を、とるにたらぬ些事の上にとどめようと努力した。<sup>5</sup>

上の引用は同性愛者悠一が属する男だけの世界における女の強大な存在に対する言及である。女性は実は「巨大な影」として男の世界に本源的に関わり、圧迫を及

ぼし、男たちの行動を規定する。この記述はまた、男性論として『禁色』が論じられてきたこととは逆に、この作品においてむしろ女性を注視する必要性があることを私たちに明確に教えるものである。たしかに『禁色』では、登場する全ての人物を操るような俊輔と魅力的な美青年の主人公悠一が描かれている。しかしこの男性たちは結局、自ら女性たちのコントロール下に入るのであり、作品はこうした女性たちとして、主に康子と鏑木夫人、そして恭子を描き出すことに力を傾注している。

本論文では、三島文学研究においてこれまで本格的に研究されてこなかった男性を支配する女性像に着目して、俊輔の復讐対象として設定されている康子、鏑木夫人、そして恭子それぞれの立場から分析をおこない、俊輔と悠一が三人の女性各々に操られる様子を明らかにする。この観点から、『禁色』の分析をおこなうことで、悠一を通して描かれる同性愛や俊輔と悠一のホモソーシャルなつながりが、三島の描く支配的な女性像とどのような関係にあるのかを明確にするのが本論文の目的である。

## 2. 導く者としての康子

「康子は遊びに来るたびに馴れ、庭さきの籐椅子に休んでみた俊輔の膝の上へ、平気で腰を下ろすやうなことをするまでになつた。このことは俊輔を欣ばせた」<sup>6</sup>。複雑な構造の長編である『禁色』は、女性人物・康子を描写するこの一文から始まる。女性への復讐が主なテーマであることとも考え合わせると、康子という女性がこの作品を開始させていることは看過できない。むしろ主人公の妻となる康子が重要人物であることは言うまでもない。そこでまずは康子と男性人物との関係性についての検討をおこなっておきたい。

66歳の老作家・俊輔にとって康子は欲びの対象、愛する相手である。しかしその一方で、「康子は彼（俊輔—引用者注）を蔑んだ」<sup>7</sup>という叙述が示しているように、康子の方は俊輔に軽蔑を抱いており、二人には認識の差がある。一生のあいだ女性に裏切られてきたことから俊輔は女性に対する復讐を図るが、それは俊輔の自己認識の過程と重なっている。これに関しては4節で恭子という人物の分析と共に検討することにするが、俊輔にとって康子は最後の恋の対象であるが故に俊輔の復讐相手として特に重要な存在と位置づけられる。ここから女性への復讐は始まり、物語も始まるのである。すなわち康子は男性人物だけでなく、物語全体をも導く者であると解釈できる。ここで興味深いのは、俊輔が「康子を愛した」<sup>8</sup>と認識していることである。愛しているからこそ康子が旅に出たことを知った俊輔は彼女を追って伊豆半島までいく。だがそこで俊輔が出会ったのは、康子の連れの男性の悠一である。そしてその悠一からたまたま「僕は女を愛せないんです」<sup>9</sup>と聞いて俊輔は康子への「復讐」を思い立つ。

康子が悠一との結婚に至る過程は果たして俊輔によって操られたものであろうか。俊輔と悠一の対話を覗き見た康子が「幸福の豫感を感じたのは自然であった」<sup>10</sup>と作品には書かれている。つまり康子は自ら悠一との結婚を予見していて、それを当然のように感じている。ここから、康子自身が悠一との結婚を計画し、それを実現させたのだとも読むことができる。伊豆まで悠一と俊輔を招き二人を引き会わせたのは康子だったのである。『もし打ち明けられた悩みが死ぬべきものなら、一緒に死ぬことなんか何でもないので。わざわざここへ悠ちゃんを誘ひ出した気持ちのなかには、瞭らかにさういふ決心もあつたのに』<sup>11</sup>という康子の台詞が示すように、康子は死をも覚悟するほど強く悠一を渴望していた。その感情が愛であるかどうかは不確かであるが、康子はこの渴望を満たすべく結婚を願い、それを成就させる。ここで男性を巧みに操る康子の力がみえてくる。俊輔は同性愛者の悠一と康子を結婚させたことで康子への復讐を果たしたと思っているが、康子から見れば以前から蔑んでいた俊輔を利用して、念願の悠一との結婚を成し遂げたわけである。

この結婚で苦しむのは康子ではなくむしろ悠一であり、康子は以下の引用にあるように「ほとんど幸福」に満たされた新たな居場所を獲得している。「若い良人が理由の不明な慌しい生活をつづけてゆき、登校するかと思へば深夜に歸つたり、家にゐるかと思へば突然出かけりする、母親のいはゆる「無頼漢」の日常を送つてゐるあひだも、康子の生活は今やまことに平穩で、ほとんど幸福といへるくらゐであつた。この安奉には謂れがあつた。彼女は自分の内部にしか興味を持たなくなつてゐたのである」<sup>12</sup>。悠一に愛されていないことは康子にとって何ら苦痛ではない。自分自身に沈潜していくことで幸福感を高めていく康子にとって男性の愛の有無は無関係であり、相手のあり方などは初めから問題外であると言える。これに反して悠一は、康子との初夜後「こんなことをやつた奴は、あとにも先にも一人もゐない。僕一人なんだ」<sup>13</sup>と絶望的な孤独感を味わい、この感覚が悠一を男色の世界へ向かわせる。ここから悠一を男色の世界へ導いたのも康子だと言うことができる。まず、悠一を苦しめる康子との夫婦関係のシーンを確認したい。

……とまれかくまれ、悠一の寢床には、もう一人の美しい雄がなければならなかつた。彼の鏡が、女との間に介在しなければならなかつた。その助けを借りずには、成功は覺束なかつた。彼は目をつぶつて女を抱いた。そのとき悠一は自分の肉體を思ひ描いてゐたのである。

暗室の内に二人はかうして徐々に四人になつた。といふのは、實在の悠一と少年に變容した康子との媾ひが、女を愛することができると思像された假構の悠一と實在の康子との媾ひと、同時に進行する必要があつたからである。この

二重の錯覚からは、時折夢見がちな歓喜が迸った。それが忽ちはてしれない倦怠に移った。悠一は幾度か、放課後の母校の人影一つない広い運動場の空白を幻に見た。彼は陶醉にむかつて身を投げた。この一瞬の自殺のおかげで行為が終わった。しかし明る日から、自殺が彼の習慣になつたのである。<sup>14</sup>

康子との夫婦生活の描写は、上の引用部を含む第四章「夕まぐれに見た遠火事の効能」以外にはほとんどない。悠一にとって康子との夫婦関係は欲望の存在しない、特異な想像が必要な空虚なものである。そのため、悠一の絶望的な孤独感は深くなり、同類を求め、同性愛の世界へ踏み出していくことになる。したがって悠一にとって、康子は新たな世界への導入の機能を果たす存在と言える。康子は自分の意図どおりに男性人物を導いて結婚に至ったが、悠一との結婚以後の彼女は、特段意図することすらく男性人物を導いているのである。

悠一を苦しめた康子との肉体関係の結果、康子は妊娠する。そして出産の際に康子は圧倒的な存在感を作品において示す。以下は康子のお産場面である。

苦しみの絶頂にゐる妻の顔と、かつて悠一の嫌悪の源であつたあの部分が眞紅にもえ上つてゐるのを、見比べてゐた悠一の心は、變貌した。あらゆる男女の嘆賞にゆだねられ、ただ見られるためにだけ存在してゐるかと思はれた悠一的美貌は、はじめてその機能をとりもどし、今やただ見るために存在してゐた。ナルシスは自分の顔を忘れた。彼の目は鏡のほかの對象にむかつてゐた。かくも苛烈な醜さを見つめることが、彼自身を見ることとおなじになつた。

今までの悠一の存在の意識は、隈なく「見られて」ゐた。彼が自分が存在してゐると感じることは、畢竟、彼が見られてゐると感じることなのであつた。見られることなしに確實に存在してゐるといふ、この新たな存在の意識は若者を酔はせた。つまり彼自身が見てゐたのである。<sup>15</sup>

上のおおりに、康子のお産によって悠一は大きく變貌していく。世にないような美青年である悠一は、それまで常に「見られる存在」だったが、康子のお産で視線の転覆を体験する。「見る」ことを強いられることで、それまで自分を見られる對象としてしか認識できなかった悠一は、はじめて見る主体となるのである。そして、康子を見ることによって、「現実の存在」である彼自身を直視することになる。

ここで注意を払っておきたいのが、康子のおこなう「生む」という行為である。『禁色』は男色を具体的に書いた稀有な作品というだけでなく、女性のお産場面を異様なまでに詳しく描いた唯一の作品でもある。小林和子は三島文学における「生む

事」について次のように指摘している。「主人公達に自らの誕生を見させ、妻の出産を見ることを経験させ、生の原初、人間存在の原点を確めた作者は、「金閣寺」において、「見る事が私の生きている証拠だ」という「私」を主人公に設定して、これ以降女たちに生む事を禁じていくことになる」<sup>16</sup>。小林の分析のとおり、生む行為は女性にのみ可能なものであり、女性に自ら肉体の苦痛、その感覚から実存していると自覚させる。他方で、男性は「生む」行為を見ることで自身が現実的に「生きて」いることを認識する。康子の出産を機に、悠一は見られる人間から見る人間へと変貌し、こうして初めて現実世界において自らの存在を獲得するのである。この「生む」行為は悠一だけでなく康子自身を大きく変貌させる。「死」にすら至ることもある生む行為は女性にとっては身体の苦痛の極限的な象徴であり、女性はこのことによって自身の自我に目覚めるのである。三島の1957年の作品『美徳のよろめき』では、中絶手術を繰り返す節子が登場する。彼女は反復する体の苦痛（麻酔も効かない、死に至る苦痛である）を通して「生きて」いる感覚を取り戻し、人間としての成長を見せるが、これと同様に康子も生む行為によって、一層自我と向き合っていく。

康子は出産を機に現実からはなれていき、悠一の同性愛が暴露される手紙事件の際も、彼女は表に登場しない。この康子に対して「聖母性」を指摘した論が複数ある<sup>17</sup>。これらは自己犠牲によって夫を支える妻として康子を分析したものであるが、たしかに悠一に実存の感覚を呼び覚ます点では康子を聖母マリアのごとき救いの女性だとも読むことも可能であるかもしれない。しかし、その裏にあるのは献身的な聖母性というよりは、むしろ夫への無関心ではないだろうか。康子の出産は悠一を現実へ回帰させた決定的な事件であると同時に、康子自身にとっては自らを現実から引き離して自分の世界に耽溺する機会であり、以後は夫の存在は不要となる。康子にとってもはや悠一は、単なる「一人の青年」<sup>18</sup>であり、ただの「物質的な印象」しか残さない存在となるのである。

ここで「愛されない」というモチーフの重要性に目を向けたい。『禁色』という作品の骨格を支える俊輔の女性への復讐は、女性から「愛されない」ことと関わるものであるが、「愛されない」ということに対する男女の態度の差異がこの作品で明瞭に描かれている点が興味深い。俊輔は女性からの愛の不在にこだわってまるで女性の愛（の不在）に支配されているような姿をみせる。これとは対照的に、康子は悠一からの愛が不在でありながらも悠一には拘泥せず、その一方で自分の意図がある場合も、ない場合も、男性たちを導く機能を果たしていることはすでに確認したとおりである。

### 3. 救済する者としての鍋木夫人

上に、男性を導く重要な女性人物として康子を分析したが、悠一の同性愛が表面化すると同時ににわかに浮上する人物が、俊輔の復讐対象の一人の鍋木夫人である。三島は自分の理想の女性像を「美しく、凛々としてをり、男性に対して永遠の精神的庇護者」<sup>19</sup> であるような存在だと述べていたが、鍋木夫人はまさにその典型である。第3節ではこの鍋木夫人について分析をおこなっていきたい。

明る日の夕方、湯河原の旅館から電話があつて鍋木夫人の死をしらせて来た。モルヒネを含有するパピナールを呑んだのである。この品のよい鎮痛剤は、致死量を呑んでも僅々十分で安らかに眠れるのである。

信孝は悠一を伴つて、夫人との新婚の第一夜の宿であるその湯河原の馴染の旅館へかけつけたが、信孝は往きの車中を泣きつづけ、遺骸の傍らに、見るべきでないものを見たといふ趣意の、簡単な走り書の遺書を見出だしたとき、さらに大声をあげて哭いた。悠一はこの奇妙な夫婦愛のあらはれを前にしては、彼自身の甚だ自然な涙の介入の餘地がないことに茫然とした。<sup>20</sup>

三島は、『禁色』の第一部を雑誌に発表した後、珍しいことに原稿の改訂<sup>21</sup>をおこなった。上の引用は改訂以前の元の原稿における記述であるが、これによると、鍋木夫人は自分の夫と悠一の同性愛関係を知り、姿を消してしまう人物であったが、改訂により自殺という設定は取り消しになって彼女は蘇り、新たな任務を担うようになる。女性への復讐のため俊輔は、女性から愛されるが女性を愛せない悠一を利用し続けようとするが、「現実の存在になりたい」と俊輔の呪縛から逃れることを悠一が考え始めることで、二人の関係は少しずつ変化していく。俊輔と悠一の力関係は次第に逆転していき、最後に俊輔は自殺を選択する。元のプランではパピナールで死んだはずの鍋木夫人の代わりに、俊輔がパピナールによって死ぬことになるのである。まさに俊輔と入れ替わるように物語の中で存在感を増していくのが鍋木夫人である。悠一が俊輔の呪縛を解いて「現実の存在」になるためには、夫人の存在が必要なのである。こうして悠一と俊輔の男性世界は「女の影」に沈んでいく。以下に女性に頼る男性の姿を確認しよう。

悠一は助力を欲した。すぐ思ひ浮かんだのは俊輔である。しかしこんな成行の責任の一斑が俊輔に在ることに思ひ當ると、憎しみがこの名を消した。彼は机上に置かれてゐる、つい二三日前に讀んだ京都からの手紙を見た。鍋木夫人

に來てもらはう、今の僕を助けてくれるのは夫人だけだ、と悠一は思った。<sup>22</sup>

上のおり、自分の同性愛が暴露された時、悠一は、俊輔ではなく鏑木夫人に助けを求める。自分に対する欲望に根ざした俊輔の愛に気づいたことで、悠一にとって俊輔はそれまでの庇護者としての資格を失ってしまっている。代わりに悠一には新たな庇護者が必要となり、その役割を担うのが鏑木夫人である。しかし、そのためには悠一と彼女の間に恋愛関係があってはならない。悠一の庇護者であった俊輔が彼に恋情を抱くことでその座を失ったからである。しかし、女性の鏑木夫人は同性愛者である悠一にとっては互いに愛に陥る危険性のない安全な相手であり、かくして悠一にとって自分の庇護者としての鏑木夫人のステータスは揺らぐ心配のないものとして確保されている。ここで興味深いのは悠一のこの論理と抵触することなく、鏑木夫人が悠一を自分にとっての最高の愛の対象とみなしていることである。このあたりの事情を理解するためには、彼女が悠一を愛する理由を作品が次のように説明していることに注目しなくてはならない。「彼女（鏑木夫人—引用者注）がこれほど悠一を愛して倦まないのは、必ずしも悠一が美しいからではなく、他でもない、彼が夫人を愛さないからだ」<sup>23</sup>。相手が自分を愛さないからこそ自分は相手を存分に愛することができるという異様な論理が掲げられている。この奇妙な理屈は、実はほかの三島作品でもよく登場する。叶わない恋に邁進し、自分だけの観念的な愛の世界に住む女たちが描かれている作品として「獅子」、「班女」、「牝犬」等が挙げられる。同じく鏑木夫人は「姿をあらはすとき、一瞬にして崩壊する幸福」<sup>24</sup>を察知し、「自分のみない場所にだけ相愛の幻影を甦が」<sup>25</sup>こうとする。彼女は悠一への愛を内面に押しとどめ、現実には決してそれを表さないことにする。こうして夫人は悠一の庇護者であり続ける。

鏑木夫人が悠一の庇護者となる過程における悠一の母のあり方は興味深い。息子の同性愛の暴露の際、南未亡人は自分の息子の存在を否定する。それは、悠一のあり様をそのまま受け入れる康子との対比によってより浮き彫りにされる。そして南未亡人は自分の母としての役割を鏑木夫人へ譲渡してしまう。息子の同性愛を受け入れないだけでなく、悠一の母親という役割を捨てるのだが、これについては以下で確認することができる。

「あたくしは今日、よほどの決心をしまりましたの。あんな手紙でおびやかされていらつしやるよりは、本當のことをお知りになつたほうが、あなたにも康子さんにも、お為になると思つたからですわ。悠ちゃんも二三日あたくしが旅にお連れします。あたくしも悠ちゃんも、まじめな戀愛をしてゐるわけ



ぢやありませんから、康子さんは心配なさることはないと思ひますわ」

傍若無人なこの分別の明快さに、南未亡人は頭を下げた。鎬木夫人には、ともかく犯しがたい氣品があつた。未亡人は母親の特權を放棄した。そして夫人の中に、自分よりももつと母親らしいものを見出してゐる彼女の直感には正しかつた。彼女は自分が世にも滑稽な挨拶をしてゐるのに氣づかなかつた。

「悠一の場合は、どうかよろしく願ひいたします」<sup>26</sup>

上の引用で分かるように、南未亡人は混乱のうちに母としての役割をいかにも簡単に鎬木夫人へ譲渡する。夫人の中に自分よりももつと「母親らしいもの」を見出し、全てを託して息子を送り出してしまふのである。こうした鎬木夫人については既に「母性」を指摘した論がある<sup>27</sup>。しかし、悠一の救済の人物が身内の母や妻ではなく、他人の鎬木夫人であることには十分注意すべきである。これは、改訂以前の原稿では死んだはずの人物である彼女が蘇つたことと関わるはずであるが、三島は次のように原稿改訂の理由を説明している。「第一部の末尾で夫人を自殺させることは、当初のプランでもあつたが、雑誌の最終回の原稿で、計画どほりに夫人を殺してから、私は早まつたと思つた。この人物には書くにつれて愛着が増して来てをり、殺すには惜しい女だつたからである」<sup>28</sup>。この改訂によって生まれた後半部での鎬木夫人の役割の重要性は顕著である。再会した時の鎬木夫人は急に母性的な人物に変わっている。後半部の悠一は以前自身の庇護者であつた俊輔の影から逃れ、鎬木夫人が母性的な人物と化して俊輔の穴を埋める。実母からその役割を渡された彼女を母性的であると解釈することは簡単であるが、家族に属さない外部の人間という設定から考えると、「十日の菊」の菊、「只ほど高いものはない」のひで、「朱雀家の滅亡」のおれいなどで描かれる一連の「女中」像が喚起される。三島作品における女中たちは、その家に属する全ての出来事や、人物の心までを知つていて、女中なしではその家の存立自体が危うくなるほどである。物語の主軸として主導權を握る人物像として描かれるのである。彼女たちは母や妻としての役割を代行し、窮地に陥つた人物たちを救う存在として登場する。このような女中像を念頭に置くと、鎬木夫人はこの「女中」像に当てはまる人物だと思われる。彼女は悠一の日常や生活に属さない外部の人間であり、悠一の実母から母の役割を譲り渡され、窮地に陥つた悠一を救う存在として描かれている。悠一を保護するためなら恥をかくことも嫌わず、断固とした行動力を見せる鎬木夫人は、南家の人物たちを簡単にごまかし、自分の意志どおりに操る三島文学の女中像の典型だと捉えることができる。

偽りの証人となつた後、鎬木夫人は悠一を連れて旅に出るが、この旅で鎬木夫人は決して女を愛さない悠一を前に自らの感情を押し殺し、「乳母」という役割を全

うする。乳母に徹することでは悠一への全的な支配を勝ち得た彼女の姿を以下に確認することができる。

此度の上京と、それにつづく志摩への旅に際して、夫人が固めた自己放棄の決心は雄々しかった。単なる抑制でもない。克己でもない。悠一の住んでゐる觀念の中にだけ住み、悠一の見てゐる世界だけを信じ、彼女の希望がほんの一分でもそれを歪めることを自ら戒めてゐたのである。かうしておのが希望に汚辱を與えることが、おのが絶望に汚辱を浴びせるのと、ほとんど同じ意味を持つまでには、永いむつかしい練磨が要つた。(中略)何もすることがないのにいつまでも起きてゐたがる子供のお相手を、乳母に身を落した鎬木夫人が勤めてゐた。

むかし勝利者の倨傲だと想像してゐたものが皆子供の氣紛れにすぎなかつたことに氣づいた夫人は、この發見がいやでもなければ、がっかりもしてゐなかつた。今では、こんな悠一の自分一人たのしさうな夜更かしが、彼の落着き方が、何もせずゐるときの一種獨特の快活さが、悉くかたはらに夫人がゐてくれるといふ意識にもとづいてゐることを、夫人自身心得てゐたからである。<sup>29</sup>

上の説明のとおり、鎬木夫人は自分を悠一の庇護者である乳母として定めるが、これは、女から乳母に身を「落とす」どころか、悠一に対する全面的な支配者への昇格であると解釈することができる。乳母とは生命を牛耳る者であり、鎬木夫人が自ら乳母と位置づけたのは悠一を牛耳り、支配することを意味する。彼女は悠一の精神のメカニズムを完全に把握し、悠一の幸せは彼女の庇護によるものである。夫人の庇護により母や妻から同性愛者の烙印を押される危機を免れた悠一は、この旅によって異性との関係への恐怖からも救われたと言えるだろう。悠一は以前の事件などは完全に忘れ、「たのしい旅の思ひ出を大いに培」<sup>30</sup>っており、夫人を「この世に唯一人安心して相共に語るに足る女」<sup>31</sup>と感じ、「無上の信頼のうちに、快く疲れた體を横たへて眠」<sup>32</sup>するなど、知らないうちに異性に対する認識が変わり、女性の保護下で安心するのである。鎬木夫人は俊輔から譲り渡された悠一の庇護者としての資格に、南未亡人から譲渡された母としての役割を加え、今や悠一に対して完璧な庇護者、救いの人物となつたのである。

こうした鎬木夫人の庇護の下で悠一は悲惨な目にあうこともなく、俊輔の巨額の遺産を相続することで『禁色』は終わってしまう。この結末に関しては悠一の成功や成熟を読みとる次のような様々な解釈がなされてきた。「男色という倒錯した性を持ち続けたまま悠一はやすやすと市民社会の一員へと変身をとげていく」<sup>33</sup>、「南

悠一は、成熟に向って、男としての主体性をとりもどし幸運な結末をむかえる」<sup>34</sup>。しかし、悠一がこうした結末を迎えることができたのは鏑木夫人の保護があってこそであり、「女の影」の下でようやく安定を得た主人公の姿が作品末に残されるのである。

#### 4. 自足する者としての恭子

俊輔の復讐の対象の中でも上の康子や鏑木夫人と比べて、比較的存在感の薄い人物が穂高恭子である。作品の途中で姿を消してしまう人物でもあるので、その存在感はより薄弱である。しかし、俊輔が唯一「復讐」に成功する対象である以上、恭子についての検討は重要であろう。この節では恭子について分析を行うことにする。

恭子に対する描写では「不幸」、「愛されない」などのように感情的に否定的な形容詞が異常なまでに使われている。また悠一が恭子に対して「僕はきつとこの女を不幸にしてみせるぞ」<sup>35</sup>と反感を表すさまは、普段の彼から考えると異様さが極立っている。恭子の人生は「無数の小粹ながらくたに充ちてゐる」<sup>36</sup>で、彼女自体が「失神状態」<sup>37</sup>であると表現され、生きている人物とは言えないほどである。いかにも「重み」がない、きわめて薄弱な存在感しか与えられていない恭子の姿を以下で確認する。

恭子はもはやちつとも悠一を愛してゐないと言つてよかつた。かうして會つてゐることの、萬遍のない快さ娛しさがあるだけである。彼女は漂つてゐた。風に運ばれる植物の種子のやうに、今まことに軽やかなその心は、白い冠毛を生やして漂つてゐた。誘惑者は必ずしも自分の愛してゐる女を求めない。精神の重みを知らない、自分の内部に爪先で立つてゐる、現實的であればあるほど夢のやうなこの女は、誘惑者の好餌に他ならない。<sup>38</sup>

上のおおり、恭子は風に漂うほど軽く、中身のない肉体だけをもつような存在として描写されているが、悠一にとっては「恭子のことを考へるたびに、心が不快に笹くれ立つた」<sup>39</sup>と彼女の存在自体がきわめて否定的に感じられる。俊輔によって女性への復讐の一環として恭子を魅惑する任務を任された悠一にとって、愛に無縁な恭子は扱いにくくやっかいな存在である。女性を愛せないがゆえに女性の感情を理解し、利用することができない悠一にとってはなおさらである。ところで悠一は恭子を「戀心といふものを知らない」<sup>40</sup>、「戀のできない女」<sup>41</sup>であるとみなす。恭子についてのネガティブな評価は主に、悠一によるもので、悠一は「愛されてゐな

い」<sup>42</sup> 恭子は不幸だと判断している。しかし、悠一の認識とは違って恭子自身は、「いつも自分が相手から愛されてゐる」<sup>43</sup> と確信しているのである。「悠一がやさしく氣を遣ひ、ほかの女には目をくれずに恭子一人を見飽かないその風情を見ては、恭子は至極當然のやうな氣持がした。つまり幸福だつた」<sup>44</sup> という叙述からふたりの関係には認識のズレがあることが分かる。恭子は、俊輔と悠一の計略により、それと知らずに俊輔と一夜を過ごす。酒を飲んだ恭子は悠一と一緒にいると思ひこんでいたのである。しかし、恭子は自分を襲う不幸に超然としている。つまり俊輔と悠一の目には恭子がワナにはめられた不幸な存在と映るが、それは彼らの見方にすぎない。恭子が実際に肉体的関係を結んだのは俊輔ではあるものの、彼女には「自分が希ふやうな姿に化身し」<sup>45</sup> ているという感覚と、理想の相手である悠一との関係を成就し、彼から愛されているという幸福感があるだけだ。そもそも「正しく視る人は一人もない」<sup>46</sup> のであり、恭子はまさに自分独特の認識方法を駆使し、自らを「愛される」存在と考えて自足しているのである。

俊輔との一夜の後、恭子は姿を消してしまう。それ故、恭子は男性の復讐に利用された弱者だという解釈がされがちであると思われるが、こうした恭子が俊輔に対して誰よりも強い影響を与える存在であることに注意したい。恭子への復讐は、「自分自身（俊輔—引用者注）および他人に對する客觀的な關係の認識が缺けてゐた」<sup>47</sup> 俊輔に「自身が決して愛されない」<sup>48</sup> ことを認識させるきっかけとなる。醜い自分と一夜を過ごさせることが俊輔にとっての恭子への復讐であるが、恭子はそれに気づいていないのだから、そもそも復讐と呼べるかは疑わしい。「醜さ」を如實に見てゐたのは、恭子ではなくてむしろ、俊輔のはうであつた。女が快樂の呻きをあげたその瞬間にも、彼は自分の醜さを忘れてゐなかつた」<sup>49</sup> と叙述されるように、この計略は逆に俊輔自らを苦しめることとなる。俊輔は恭子を犯すことで、彼女を苦しめ、女性に君臨することができたと一瞬錯覚するが、俊輔に残つたのは自分のふるまいは結局「愛されない者の身振にすぎない」<sup>50</sup> という認識であり、自分には「世間で謂ふ「人間らしさ」もなかつた」<sup>51</sup> という自己反省である。俊輔をこのような過酷にも正当な自己認識に至らせるのが、常に否定されていた現実の恭子の肉体である。このことを考えると、恭子が決して弱い立場の人物ではないと思われる。康子が俊輔の女性への復讐を導く役だつたとすれば、恭子はそれを終わらせる役を担っており、精神の権化であつた俊輔を精神的に屈服させたのではないだろうか。むしろ恭子は、すでに女性によって精神的に支配されていた俊輔にそれを認識させる鏡のような働きをする人物とみることが出来る。俊輔は「その醜さのためにつひぞ實母に愛されなかつた」<sup>52</sup> という描写から分かるように、生まれながら愛に飢えるとともに愛情を身につけることができなかつた人物で、母の冷たさから生

まれた女性の愛への渴望、これが彼の精神の源泉なのである。しかし老年に至っても俊輔はそのことを自覚していなかった。だが、恭子を犯した後、俊輔は初めて、愛されないがゆえに女性に執着していた自分をまざまざと発見するのである。以下でこれを確認することができる。

榎俊輔は愛されない存在が、愛される存在を犯してしまつたこのおそろしい瞬間を何度か知つてゐた。女が征服されるといふのはあれは小説の作つた迷信だ。女は決して征服されない。決して！男が女に対する崇敬の念から凌辱を取てする場合がままあるやうに、この上ない侮蔑の證しとして、女が男に身を任す場合もあるのだ。楠木夫人はもとよりのこと、三人の妻の一人として、ただの一度も彼に征服されはしなかつた。悠一の幻の麻醉のうちに身を任せた恭子にいたつては、殊更さうである。理由と言つては、一つしかない。俊輔自身が決して愛されないことを確信してゐたからである。<sup>53</sup>

復讐であるはずの俊輔が恭子を犯すこととは「はじめから絶望してゐる彼の行為」<sup>54</sup>と説明され、恭子に対する俊輔の復讐は意味を失う。女性を征服しようとして俊輔がとつてきた行動は、実のところ俊輔に対する女性の力を証し立てていたので。さらにつけ加えて言えば、これは恭子が俊輔の精神の底に沈殿して、彼を支配することであると解釈できる。女性を征服するには「女性から愛」されるという条件が必要だが、それが欠如している俊輔は決して征服できない女性の巨大な力に目覚める。愛されないという感覚は人間としての存在意義を失うことであり、それを覚醒した俊輔は死に至らざるをえなくなる。精神の権化である俊輔の死については肉体に対する「精神の敗北」との解釈がされやすいが、俊輔を死に至らしめたのは肉体の象徴とされる悠一ではないことには注目すべきであろう。俊輔は男性の肉体、すなわち悠一ではなくむしろ復讐の対象であつた女性を通して、自分の精神と向き合わされ、死に至るのである。

ここで興味深いのは、死に至る存在が女性ではなく男性であることである。三島作品で「死」は重要なテーマであり、作家自身の死と関連して頻りに研究されてきた。しかし、三島文学の中では心中を除けば自らの意思で死ぬのは殆どが女性であり、男性が自ら死を選ぶのは稀である。『禁色』の俊輔は自ら死を選ぶ稀な男性として描かれるものの、彼の死までの経緯には女性である恭子が関わっており、ここでまた、二人の認識の対比が歴然と現れる。前述のとおり恭子にとっては自分に向けられる他人の視線は無意味なものであり、愛されていない彼女も自足できた。しかしそれとは違って、自分が「愛されない」存在であることを確認した俊輔は、

その状態を耐えることができずに自殺する。ここで、男性にとっては存在意義を失うことと同価である「愛されない」ということをも超然と乗り越える、征服されない力強い女性が浮かび上がる。

こうして、三島作品の女性たちは男性人物を正しい自己認識に至らせると同時に破滅させる力を持つ人物として登場する。しかし、男性人物が女性の影響下におかれる過程には女性側からの圧力があるのではなく、女性の支配下で破滅してしまう俊輔であれ安堵感を感じる悠一であれ男性自らがそれを選択していることが重要である。たしかにこの作品は男性の精神に焦点を当てているが、その男性の精神を支え左右しているのは女性であり、男性の主体的行動は自ら女性の力の下へ身を置くこととして描かれるのである。

## 5. おわりに

三島文学研究において女性像はこれまで本格的に研究されてこなかったが、本論文では、男性を支配する女性に着目して『禁色』を分析した。特に、作品の表面的なテーマとなっている女性に対する俊輔の「復讐」に注意を払い、彼の復讐の過程を分析して、それ自体がすでに女性の影響下にいる彼の姿を表していることを確認した。三島文学の男性人物は主人公でありながら、その存在感は薄いか間違った自己認識に陥っていることがほとんどである。そしてこれとは対比される形で主体性をもつ女性人物が男性人物を操る存在として顕著に現れる。明らかにこれは、女性を男性の「従属者」のように述べる三島のエッセイでの発言<sup>55</sup>とは矛盾しており、そうした三島の女性観は、実は、作品の主体としての女性像につながっているのではないかと考えられる。三島作品における、男性を操る超越的な存在とも言える女性人物についての検討は、今後の三島文学研究に欠かすことのできない主要なテーマであることを確認して本論文の結びとしたい。

## 注

- 1 第一部（第1章～第18章に相当）を『群像』1951年1～10月号に発表、同年11月に『禁色第一部』として新潮社より刊行された。第二部（第19章～第33章に相当）を『文学界』1952年8月～1953年8月号に発表、1953年9月に『秘楽 禁色第二部』として新潮社より刊行された。1954年4月『三島由紀夫作品集3』に収録される際「秘楽」の題を抹消して『禁色』で統一、章も通し番号に改められた。三島は、『禁色』の第一部の終了から第二部の開始されるまで10ヶ月の空白期間に、始めての世界一周に旅立っている。大ま

かな内容は以下のとおりである。

檜俊輔は、同性愛者の南悠一の特質を利用して、自分を裏切った鏑木夫人・穂高恭子・瀬川康子に復讐をはかろうとする。康子は悠一と結婚して愛のない結婚生活を味わい、鏑木夫人と恭子は、悠一へ激しい嫉妬に苦しむ。しかし、悠一は次第に俊輔の手をはなれて独立して生き始める。悠一は妻との間に子供（溪子という女の子）を作りながら、一方では男色の世界にも交わってゆく。俊輔の復讐の試みは失敗した。俊輔は、悠一への愛を告白し、悠一に巨額の遺産を残して自殺する。

- 2 「『禁色』は廿代の総決算」（初出『図書新聞』1951年12月17日）、『三島由紀夫全集』第25巻、新潮社、1976年、492-494頁。
- 3 例えば以下の論文等がある。山田有策「禁色—＜精神＞の敗北」、『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、1976年2月号、116-119頁。奥野健男「『禁色』—反世界の構築と破局」、『三島由紀夫伝説』、新潮社、1993年、254-279頁。李惠慶「三島由紀夫と「ホモソーシャル」な欲望—ジェンダー・パフォーマンスを中心として」、『日語日文学研究』第38輯、韓国日語日文学学会、2001年、233-252頁。井上隆史「『禁色』論—「精神性」の喜劇と芸術至上主義」、『三島由紀夫研究⑤ 三島由紀夫・禁色』、鼎書房、2008年、50-65頁。中尾莉奈「三島由紀夫『禁色』論—理想と現実の対立」、『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第17号、広島女学院大学大学院言語文化研究科、2014年3月、72-92頁
- 4 女性人物についての言及がいくつかの論文であるが、中元さおりは（「三島由紀夫『禁色』におけるもう一つの物語—女たちの交錯の様相」『近代文学試論』、広島大学近代文学研究会、2008年12月号、51-60頁）恭子への検討が全くなく、康子と鏑木夫人の献身的な姿に注目し、日高佳紀は（「交換と模倣—『禁色』における＜対話＞の回路」、『三島由紀夫研究⑤ 三島由紀夫・禁色』、鼎書房、2008年、66-76頁）男性たちの連帯を揺さぶりをかけると女性たちの存在を認めながらも、それを女性たちの「愛情」に局限している。
- 5 『禁色』、『三島由紀夫全集』第5巻、新潮社、1974年、133-134頁。（引用においては一部旧字体を新字体に改めたところがある。）
- 6 同上、9頁。
- 7 同上、10頁。
- 8 同上、53頁。
- 9 同上、39頁。
- 10 同上、56頁。
- 11 同上。
- 12 同上、375頁。
- 13 同上、72頁。
- 14 同上、72-73頁。

- 15 同上、404-405頁。(強調の傍点は圏点に直した。以下同様。)
- 16 小林和子「『金閨寺』断想—三島文学の生む事を禁じられた女達」、『茨女国文』第6号、茨城女子短期大学、1994年、36-45頁。
- 17 例えば以下のとおりである。中元さおりは(「三島由紀夫『禁色』における〈もう一つの物語〉—女たちの交錯の様相」『近代文学試論』、広島大学近代文学研究会、2008年12月号、51-60頁)「相対的な現実世界に住む空虚なく聖母>性」を指摘し、田中美代子は(『三島由紀夫 神の影法師』、新潮社、1994年、105-112頁)「自己犠牲に目覚めたマリア的な至高性」と、「康子の自己犠牲、淑徳、無償の愛」(「さまざまな変容—『禁色』序説」、『三島由紀夫論集1 三島由紀夫の時代』、勉誠出版、2001年、221-238頁)を指摘している。
- 18 『禁色』、521頁。
- 19 「私の永遠の女性」(初出『婦人公論』1966年8月号)、『三島由紀夫全集』第27巻、新潮社、1975年、297頁。
- 20 「禁色」、『群像』、講談社、1951年10月号、138頁。
- 21 「改訂広告」の全文：本誌連載「禁色」第一部の結末を、作者はいろいろ考えた末、左のように改訂いたします。一旦発表したものを改訂するのは好ましからぬことでありますが、長編小説の結末は三考すべきものであるにもかかわらず、そのための時日の余裕をもたなかったためであります。十月号一三八ページ十四行目「……十時ごろ帰宅した。」までそのまま。十五行目に当る左の一行で完結。「三日たった。竈木夫人は帰らなかつた。」「明る日の夕方」以下の旧十五行目以下は削除します。(『群像』、講談社、1951年11月号)
- 22 『禁色』、483頁。
- 23 同上、279頁。
- 24 同上、288頁
- 25 同上、287頁。
- 26 同上、501-502頁。
- 27 例えば以下のとおりである。高橋新太郎は(『『禁色』断章』、『国文学 解釈と鑑賞』、1992年9月号、66-70頁)「悠一は、竈木夫人の母性的なるものによって救済される」と分析し、田中美代子は(『三島由紀夫 神の影法師』、新潮社、1994年、105-112頁)「献身的な博愛に充ちた聖なる母像」を、中元さおりは(「三島由紀夫『禁色』における〈もう一つの物語〉—女たちの交錯の様相」『近代文学試論』、広島大学近代文学研究会、2008年12月号、51-60頁)「エゴイズムに起因する夫人の母性」を指摘している。
- 28 三島由紀夫「改訂広告」、『群像』、講談社、1951年11月号。
- 29 『禁色』、513-514頁。
- 30 同上、517頁。
- 31 同上、515頁。



- 32 同上。
- 33 山田有策 『『禁色』—〈精神〉の敗北』 『国文学 解釈と鑑賞』、1976年2月号、116-119頁。
- 34 田中美代子 『三島由紀夫 神の影法師』、新潮社、1994年、105-112頁。
- 35 『禁色』、267頁。
- 36 同上、352頁。
- 37 同上。
- 38 同上、357頁。
- 39 同上、269頁。
- 40 同上、272頁。
- 41 同上。
- 42 同上、274頁。
- 43 同上、358頁。
- 44 同上。
- 45 同上、356頁。
- 46 同上、352頁。
- 47 同上、9頁。
- 48 同上、374頁。
- 49 同上、373頁。
- 50 同上、374頁。
- 51 同上。
- 52 同上、57頁。
- 53 同上、373-374頁。
- 54 同上、374頁。
- 55 三島は、「女ぎらひの辯」（『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1975年）、「好きな女性」（『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1975年）、「女の友情について」（『三島由紀夫全集』第25巻、新潮社、1975年）、「私の永遠の女性」（『三島由紀夫全集』第27巻、新潮社、1975年）等で女性を男性の従属者と見なす、自分の女性観について描いている。

## 参考文献

三島由紀夫（初出年順）

『禁色』、『三島由紀夫全集』第5巻、新潮社、1974年

「『禁色』は廿代の総決算」、『三島由紀夫全集』第25巻、新潮社、1976年

「女の友情について」、『三島由紀夫全集』第25巻、新潮社、1975年

「女ざらひの辯」、『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1975年

「好きな女性」、『三島由紀夫全集』第26巻、新潮社、1975年

「私の永遠の女性」、『三島由紀夫全集』第27巻、新潮社、1975年

井上隆史「『禁色』論一「精神性」の喜劇と芸術至上主義」、『三島由紀夫研究⑤ 三島由紀夫・禁色』、鼎書房、2008年

李恵慶「三島由紀夫と「ホモソーシャル」な欲望—ジェンダー・パフォーマンスを中心として」、『日語日文学研究』第38輯、韓国日語日文学学会、2001年

奥野健男「にせナルシズムの文学」、『日本文学研究資料叢書 三島由紀夫』、有精堂、1972年  
——『『禁色』—反世界の構築と破局』、『三島由紀夫伝説』、新潮社、1993年

九内悠水子「三島由紀夫「禁色」論—記憶の遡及」、『広島女学院大学日本文学』第19号、広島女学院大学、2009年

小林和子「金閣寺」断想—三島文学の生む事を禁じられた女達」、『茨城国文』第6号、茨城女子短期大学、1994年

高橋新太郎「『禁色』断章」、『国文学 解釈と鑑賞』、至文堂、1992年9月号

田中美代子「さまざまな変容—「禁色」序説」、『三島由紀夫論集1 三島由紀夫の時代』、勉誠出版、2001年

——『三島由紀夫 神の影法師』、新潮社、1994年

中尾莉奈「三島由紀夫『禁色』論—理想と現実の対立」、『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第17号、広島女学院大学大学院言語文化研究科、2014年3月

中野裕子「『禁色』における性—『仮面の告白』から流れる性の系譜」、『國文目白』第28号、日本女子大学国語国文学会、1988年

中元さおり「三島由紀夫「禁色」における〈もう一つの物語〉—一女たちの交錯の様相」、『近代文学試論』、広島大学近代文学研究会、2008年12月号

野口武彦『三島由紀夫の世界』、講談社、1968年

許昊「三島由紀夫の作品における女中像の系譜」、『稿本近代文学』第19号、筑波大学文芸・言語学系平岡研究室、1994年

——「三島由紀夫作品に表れた男性像—『禁色』の人物構成を中心に」、『日本研究』第25輯、中央大学校日本研究所、2008年

山田有策「『禁色』—〈精神〉の敗北」『国文学 解釈と鑑賞』、至文堂、1976年2月号

「改訂広告」、『群像』、講談社、1951年11月号